

# Essay

Sapiarc.com

2014年7月22日(2014-3)

## 戸来稔雄君を偲ぶ

戸来(ヘライ)稔雄君が、去る5月8日に心臓発作で急逝した。これを私が知ったのは、所澤仁君の死去がきっかけになった。戸来君も、東大理学部化学科の同級生なので、私たち昭和34年(1959年)卒業のクラスは、2箇月ほどの間に2人のクラスメートを失ったことになる。駒場の教養学部から進学したとき、25人居たクラスメートのうち5人がこれまでに他界した。とくに今回、私は至近弾を2発続けて受けたような気がしている。

あらゆる点から見て、戸来君は優秀な学部学生だったと思う。普通の意味で成績が良かったというだけでなく、いろいろな情報に通じており、常にバランスのとれた判断をすることのできる人だった。学生実験の課題を手際よくやっけてしまい、いつも涼しい顔をしていた。

学部卒業後、彼は当時の富士製鐵に就職した。その動機のひとつは、八幡製鐵に就職することを希望する人はいたが、富士製鐵を希望する人が居なかったということだった。要するに、他人とは別の行き方をしたいと思っていたということで、独立志向または反骨精神の持ち主だったのだ。ところが、後で、富士製鐵は八幡製鐵と合併して、新日本製鐵になったので、彼の独立志向とは裏腹に、私たちの学年には、修士修了時に就職した人を含めると、4人もが新日本製鐵に在職することになってしまったのだが、これは皮肉な成行きだった。

戸来君は、富士製鐵に就職して直ぐに、広畑製鐵所内の研究開発部門に配属され、いきなり10人近くの高卒者を部下にもって、仕事をすることになった。これは、まだ大学院で研究を始めたばかりの私には考えられない状況で、よくそんなことができるものだね、と彼に言ったことがある。大変だよ、というのが彼の答えだったが、さほど困っているという様子はなかった。そこが彼らしいところだった。どういう仕事を実際にしていたのかは、私は知らない。しかし、直接製鐵に関係するものではなく、製鐵に伴って、いろいろな化学物質を取り扱う必要があるので、広い意味での化成品の取扱いが研究課題だっただろうと推測する。

2年ほどそこに居たあと、1961年ごろ、彼は、当時パリの近郊にあった鐵鋼技術研究所 (Institut de recherche de la sidérurgie, 略称 IRSID) に出向し、多分2年間ほどそこで研修をした。これは、彼自身が希望したというよりも、科学技術庁の研究所だった金属材料技術研究所の当時の所長と富士製鐵の研究開発担当役員との間で決まったことのようにだった。金属材料技術研究所は当時目黒にあったが、現在は独立行政法人物質・材料研究機構となって筑波にある。また、IRSIDはフランス政府の管轄下にあったはずだが、現在は世界最大の製鐵会社であるAcerolMittal傘下の独立した研究所になっており、正式にはAcerolMittal Maizières Research SAというようだ。所在地もロレーヌ地方のMaizières-lès-Metzに移っている。

技術関係者がフランスで研修することは、当  
時も今も比較的珍しいことだ。戸来君がフラン  
ス語を教養学部時代に第2外国語に選択して  
いたことは、これに役立ったと思う。出かける前  
に、特別にフランス語の勉強もしていたようだ。  
彼が渡仏する少し前に、私たちのクラス会があ  
り、戸来君が誰よりも早く海外に行くことにな  
ったので、皆が興味をもっていて、パリの空港  
から IRSID までどういう方法で行くのかと尋ね  
た人がいた。そのとき、戸来君は、空港だった  
かパリ市内だったか憶えていないが、ある場所  
からどこそこ行きのバスに乗って、スタスィオ  
ン・ドゥ・イルスィッド (Station de IRSID,  
つまりイルスィッド停留所) で降りると答えた  
ので、私は、よく準備していることに感心した  
憶えがある。

彼がフランスにいる間に、私たちは何度も手  
紙のやり取りをした。私は、明治以来日本人の  
多くがヨーロッパの大学などに留学したのと同  
じように、自分も行ってみたいと思っていたの  
で、戸来君が早くヨーロッパに行ったことが羨  
ましかった。私自身がヨーロッパの地を踏んだ  
のは、それより5年ほどあとの1966年のこと  
だ。

戸来君は、帰国後、相模原市淵野辺に新たに  
設置された中央研究所勤務になった。1970年  
に富士製鐵が八幡製鐵と合併して新日本製鐵に  
なってからも、そこにずっと勤務していたはず  
だ。この研究所のあった場所は、今では青山学  
院大学理工学部のキャンパスになっている。私  
は去る4月にここに初めて行った。新日鐵の研  
究所にはいくつかの建物があったのだろうが、  
そのひとつだけが今でも残っていて、大学の事  
務局が使っているが、その他に学部の学生実験  
室や研究用の場所としても使われている。どっ  
しりとした建物で、青学でN棟と呼ばれている  
ものがそれだ。戸来君がこの建物に居たのかど  
うか尋ねようと思っていたが、それはできなく  
なってしまった。

正確なことはわからないが、おそらく1990  
年代の初めごろ、戸来君は、新日本製鐵から株  
式会社日本触媒に移り、同社の取締役役に就任し

た。これには、新日鐵が日本触媒の株式を所有  
していたことが関係していたはずだが、彼が日  
本触媒に移ったあと、両者の間の資本関係はな  
くなったと戸来君自身から聞いた。日本触媒の  
本社は、大阪と東京の両方にあるので、戸来君  
は一時大阪に単身赴任していたことがあったは  
ずだ。その後、彼は常務取締役になったが、不  
幸にして心臓に問題があることがわかり、1998  
年ごろ、つまり彼が60歳を少し過ぎたときに、  
退職することを余儀なくされた。これは、彼に  
とって非常に残念なことだっただろう。彼の見  
識、実力、人格からすれば、もっと上の職に就  
けた可能性は十分にあったはずだ。しかし、彼  
は悠々としており、療養することを第一にして  
いた。彼の心臓病は簡単なものではなかったよ  
うで、何度も東京女子医科大学病院に入院して  
いた。

年に1回開催する、私たちのクラス会には、  
彼はいつも出席していた。しかし、クラス会で  
は、私たち2人が長い間話をするにはできな  
い。私は、ずっと前から、一度戸来君とゆっく  
り話をしたいと思っていた。今年の初めに、私  
は、いわゆる「虫の知らせ」があったのだろう  
が、どうしても一度彼に会って、話をしよう  
という気になった。そのことをメールで彼に提案  
したところ、快諾の返事があった。私は、彼が  
遠出しなくても済むように、彼の住まいがある  
田園調布あたりで昼食を取ることを考えていた  
のだが、彼は自由が丘にある‘Chez Soma’  
というフランス料理店にしようと言ってきて、  
2月13日に昼食の予約もしてくれた。私たち  
は、その日の昼過ぎに自由が丘駅前で待ち合わ  
せ、その店で昼食を食べながら、ゆっくりとい  
ろいろなことについて話した。この店は余り大  
きくなく、家庭的な雰囲気のあるところだった。  
男性客は私たち2人だけで、一番奥に席が取っ  
てあり、その他は全て女性客で占められていた。  
戸来君が選んだ店だけあって、料理は美味しく、  
値段も手ごろだった。

私にとって一番嬉しかったことは、今の世の  
中についての戸来君と私の考え方がほとんど一  
致していることを確認できたことだった。私が  
予想していたように、彼は物事を極めて冷静に

見ていた。彼は、自分の体調、とくに問題のある心臓のことについてもある程度詳しく話してくれた。心臓が厚くなるという現象があり、手術は危険を伴うのでしていないとのことだった。また、私には理由はわからなかったが、腎臓と相関関係があって、胸に水が溜まるので、体重が増えると、水が溜まっていることがわかるとのことだった。そのような場合には、救急車で行きつけている東京女子医科大学病院に行かないといけなくなり、最近も行ったそうだ。こういうことを彼は他人事のように淡々と話した。しかし、外見上、異常があるようには全然思えなかった。彼自身がそういう問題を抱えているせいだろうが、彼は所澤仁君の状態を心配していた。

その店には2時間以上もいて、十分に食べた。彼は少し食べ過ぎたかなと言っていた。その後、私たちは自由が丘駅の近くにある‘モンブラン’に行き、コーヒーを飲みながら、また長く話した。‘モンブラン’は本来ケーキ類が専門の店だが、もう食べる必要はないので、ケーキは取らなかった。彼は、自分のことについて、かなり立ち入ったことまで話してくれたが、それをここに書くことは控える。4時半ごろ、私たちはこの店を出て、自由が丘駅前握手して別れたが、そのとき戸来君は、彼の健康が許す間は、またこういう機会を持とうと言った。

7月11日に所澤仁君が急逝したことを知った後、私は戸来君が所澤君のことを心配していたので、所澤君が亡くなったことをメールで戸来君に知らせようとした。ところが、メールは不達になった。僅か半年前には正常に機能していたので、私は変だなと思って、彼の自宅に電話した。その結果、驚くべきことに、戸来君が5月8日に急逝していたことを夫人から知らされた。夫人によると、急に倒れて、そのまま息を引き取ったのだそうだ。救急車は直ぐに来て、蘇生を試みってくれたが、効果はなかった。家族以外には誰にも知らせず、家族葬を済ませ、年末になってから、年賀状をやり取りしている人に知らせることにしているとのことだった。これは、おそらく予め戸来君がそうするようにとっておいたのだろう。

それ以来、私は、戸来君と2月13日に会って話しておいて本当に良かったと思うと同時に、そういう機会がもうなくなったことを自分に納得させようと努めている。（おわり）